
悪戯な思春期

片桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪戯な思春期

【Zコード】

N1991BA

【作者名】

片桐

【あらすじ】

私は天草椎名。スターを愛する女子高生だ。適わない恋に思春期を捧げる毎日に、大きな変化が訪れる。人生記録風恋愛小説。因みに私が連載している”栗の変化”に登場する瑠衣とは関係ありません。私が瑠衣という名が好きなだけです。

スターの名は瑠衣

格好良いの定義を述べよ。

彫りが深い。声が心地よい低音。
スタイルが良い。スラッシュとしてる。
金髪だろうが黒髪だろうが似合う。
ピアスが映える顔立ち。
お洒落な服に負けない輝き。

そんな人、いる？

私は探してきた。

否、そういう人だけ見てきた。
どういうことか。

つまり、理想の男性のファンでありつけたのだ。何人かいる。
八年前から大ヒット曲を生み出してきた”瑠衣”は、長い銀髪を
編み込んだ斬新なルックスの持ち主だ。彼との関係が一番長い。サ
ングラスマニアで1ヶ月は同じものが被ることがない。

当然私はサングラスを買い込むこととなつた。彼のライブには七
回行つた。関東北部に住む自分にとって、東京ライブは近しいもの
なのだ。ギターもピアノもバスも興味は無い。彼だけを愛してる。

勘違いしないでほしい。

私は一般人だ。十七歳の今を生きる女子高生だ。瑠衣と目が合つ
ことすら適わない。適わないんだ。CDをいくら集めたところで、
触れられるのは声だけ。悔しいけど、それが現実。

勘違いしないでほしい。

これは、何の変哲もない女子高生が大スターを手に入れる壮大な

ラブストーリーなんかではない。寧ろ田も当てられない小さな私と
いう個人の人生記録だ、と言えよう。

天草椎名。それが私の名前。

中学生の時にパソコンの某動画サイトにて、初めてPVと言われる
ものに心奪われた一人の少女。

韓流ブームが来ようが、洋楽ロックに入り浸っていた私が、初めて
生まれた祖国のスターに恋をした。先に告白しておくと、瑠衣は
所謂V系だ。銀髪の時点で感づいていたとは思うけど。

女性が喜びそうな同性との騒動が多く、友人に堂々と彼のファン
だとは言い辛い。ただし、その名声は確かなもので、誰もが彼を画
面で見るたび「瑠衣だ」と呟く。一流スターだ。最も、彼は百九十
の身長をお持ちだから、否が応でも目立つのも事実。格好良いでし
ょう？

前置きはこの辺にしよう。

瑠衣でも私にでも興味を持つた方だけ進んで欲しい。

私は瑠衣を愛してる。

そんな生活が永久に続いて良かつた。
願わくば、瑠衣の側にたどり着きたい。

そんな適わない夢を抱く思春期だった。
生活が一変したのは。

呑まれる日常

『…今年の新曲の抱負ですか?』

瑠衣の声が私の部屋に優しく響き渡る。テレビのリモコンの音量ボタンに指をかけたまま、画面の中の彼に見とれてしまう。瑠衣はこの春新曲をリリースした。半年ぶりのシングルに、世間は大注目している。私もその一人だ。

『悶え死んでしまう快感、ですかね』

片側を剃り上げた銀髪を撫で、ハツキリと言つた。尋ねた司会者の女性がドキマギしながら質問を続ける。

『それは…恋人への思いということですか?』

観客席から黄色い歓声が上がる。

(なんだ、お前らは誰を想像しているんだ? 先日雑誌トップを飾った俳優の滋賀輝弘か?)

私は妙に冷めた心地で返答を待つた。夕飯に作った緑野菜グラタンをスプーンで無造作に混ぜながら。生クリームの香りが部屋に漂う。

『僕はね、愛する人を思いながらファンに歌を捧げるほど器用じゃないよ』

憂いに満ちた眼差しをカメラに向けて、大スターは微笑んだ。心臓が張り裂けそうになるのを抑えて、私は水を注ぐ。

『…この歌は悲恋を描いてる。相手の心を手に入れられないのに自分が快感に呑まれてゆく、そんな愚かな恋を』

後ろに控えるアイドル達がヒソヒソと話している。司会者はマイクを握り直し、瑠衣の視線を避けながら相づちを打つ。あの眼を見てしまえば仕事どころではないはずだ。生粋の日本人だと言うのに、彼の目の奥には藍色の光が宿っている。

(アイドル五月蠅い)

苛つき始めた頃、瑠衣が徐に立ち上がった。打ち合わせと違つたのか空気が凍り、観客がざわめく。ゲスト用のベンチから離れた瑠衣は、誰も止める間もなく画面から消えた。

八年間彼を見てきた私もたじろいだ。グラタンが付いたスプーンを膝に落とすほどに。司会者が取り繕おうと唇を開いた瞬間、瑠衣の声がどこまでも響いた。

『愛するファンに告ぐー!』

(?)

一瞬でカメラがステージ脇の瑠衣を捕らえる。日本中が耳をそばだてているような沈黙が流れた。瑠衣は漆黒のスーツの襟元をはだけて、気持よく叫んだ。

『是非、この歌を胸に刻んで欲しい。間違つてもこんな幻想な恋に溺れるな。僕は君たちに幸せな愛を歌つて欲しいから』

そしてミュージックがスタートした。無理やり予定を合わせたのか演出かは定かでない。どちらにせよ、彼はリスナー全員の心を引きつけてしまった。

(超絶マッハで格好良い…)

私は静かにスプーンを置いた。歌に集中するために。

「CRAZEでしょ、聴いたよ」

翌日登校早々、昨晩の話を持ち出した私を容易く遮り、美伊奈は言った。美伊奈の声は女性アイドルユニットのインタビューみたいに、いつでも高く可愛い。

『瑠衣、本当にすきなんだねえ』

呆れたようにクシャクシャと頭をいじつてくる彼女を防ぐ。小学校来の幼なじみの美伊奈は、”瑠衣好き”に引かない貴重な友人だ。パーマをかけた茶髪をクルクルに巻いて、毎日クラスの注目を集めている。

部活も無所属だというのに、異様な人脈の広さの秘密は誰も知らない。

「新曲ヤバくない？ しかも昨日のサプライズなメッセージタイ
ム！」

「ヤバくない」

朝の豆テストを淡々とこなしながら美伊奈は乾いた返事だ。幾分
氣を削がれつつも、私は喜びを分かち合つたために必死に話を続ける。

「悶え死んでしまう快感、だよ？ こっちが死にそうな位の美声
でよく言つよねー…ああ、CRAZE 聴きたい」

美伊奈は頬杖をつき溜め息一つ吐くと、ポケットから何か取り出
した。突然右耳に何かが差し込まれて、背中が反応する。

「ナニ？ イヤホンに感じてんの？」

そんな私を観察して彼女は艶やかに笑う。朱くなる顔を面白がっ
てるのだ。

「違つ…うああああああ

美伊奈のグロスがかつた唇がつり上がる。私の叫びの意味を知つ
ているのだ。

「ク、CRAZE！」

「そおだよ。聴きたがつてたからさ。椎名、あんたまだ音楽プレ
イヤー持つてないんでしょ」

事実だ。両親がいない生活で、限界の生活費の中で、逆立ちして
も音楽プレイヤーを買つお金はない。美伊奈は暫く口をパクパクさ
せて喜ぶ私を眺めていた。

（本当に s 様だよ…）

それに気づきつつも、大事な四分間を瑠衣の声だけに使う。今回
の新曲はバイオリンをバックに用いた、バラード風なものだった。
とは言え、中盤になると切ない恋にもがく心情を瑠衣が叫びに近い
声で熱唱するので迫力は文句無しなのだ。

「どうだつた？」

「ヤツきながら美伊奈が訊く。

「…最高」

「あはは。あたしも今回のはお気に入りなんだ。ほら、早く鞄

片付けないと、一分後始まるよ」

時計を見ると、一限目がカウントダウンを始めていた。廊下を一瞥し、教師の影を確認する。

(まづい… 予習まだだ)

「椎ちゃん」

焦つて数学の用意をしていると肩をたたかれた。天使の笑みを浮かべた魅美が立っていた。数学のノートを差し出し笑つて言つた。

「数学の予習まだでしょ？」

「ありがとう魅美ちゃんマジ天使！」

私はポケットから菴飴を引き出して魅美ちゃんの手の中に忍ばせた。クスリと笑つて席に戻る彼女が時計を示すと、一分も無かつた。慌てて荷物を整理する私の耳に、後ろの席の美伊奈のクックつとう笑い声が聞こえた。

昼食の時間、私は生徒会の仕事のため早々と教室を出た。早歩きで闊歩する背後から低い声で「天草さん」と呼び止められた。声の主はクラスメートの西雅樹だった。

「西君…？ なんか用？」

「天草さんってMだよね」

(なんつった今)

私は気持ちを鎮めて聞き返した。さつきのが聞き間違いか幻聴だと信じて。

「今なんて？」

西は一つの意味でクラスで浮いている。一つは天才的な頭の良さとその奇行。奇行と言つても時折威風堂々とボイコットする位だが、成績が優秀な分教師も注意を諦めた。

もう一つはルックスだ。正直瑠衣に似ている。悔しいほど長く濃い睫。百九十越えの身長とバランスよい体格。妖しく垂らした前髪。

西とは三年生で初めて同じクラスになつたが噂は聞いていた。集会の時もすぐ見つけてしまう存在だった。

瑠衣に恋してからその辺の男子と話しているのが面倒臭くなつた。ショートヘアフェチの多い学年らしく、休み時間の度「天草さんの髪型つて良いよな」だの「サラサラヘア彼女に欲しいわ」だの下らない冗談を言われてきたのだ。

(お前らが瑠衣位格好良いなら、な)

西は一度もそうした軽はずみな言動はしない。だからボイコットしようがハブられる対象にもならない。美男子は罪だ。

「Mでしょ？」

そんな西にいきなりこの言われようだ。

(なんかしたか、私)

「何なの？ 費ゲームかなんか？」

人気の少ない渡り廊下で西と対峙している今の状況が何とも間抜けだつた。西は艶やかな黒髪をかきあげて、いやらしく笑つた。何故か、目を細めて上目遣いで笑えばそれはもういやらしく見えたからだ。

(やばい…なんか混乱してる)

ゆっくり歩み寄つてくる西に背中に冷たいものが走る。避けていた所で久しぶりに話す男子の扱いがわからなくなつていた。それが伝わつたのだろうか。西は三歩程手前で止まつた。

「俺、さ」

(なんだ？ なにを言つ氣なんだ？)

知らぬ間に心臓を握り締めていた。顔も火照つていたことだろう。瑠衣と西が重なり異様な興奮を呼び覚ましていた。

「椎名が欲しくて」

紛れもなく瑠衣の声だつた。

無我夢中だつた。

気づけば生徒会室の扉に背をつけて荒く息をしていた。仲間のメンバーが心配そうにこっちを見ている。走ってきたのだろうか、脹

ら脛がジンジンと痛んだ。

『瑠衣が欲しくて』

(ばつか…馬鹿じゃないの？ いつフラグ立てたの？ 立ててないでしょ。てか瑠衣と同じ顔で反則でしょ。本気になっちゃ…阿呆か自分)

「…なー。椎名ー？」

生徒会長の奈々富が呼びかけていた。

「うん？」

「会議始めていいの？」

忘れていた。昼休みに会議するからと焦つて来たのだ。なんとか席に座り話し合いを始めるものの、全く集中出来なかつた。それは分かり易かつたのだろう。会議後に会長に呼び出された。

生徒会室脇の花壇にて会長と向かい合つ。奈々富千晴。私自身男と認識しないくらい、中性な人間だ。肩までの髪は校則をギリギリ破つていながら、女々しさを醸し出している。

立候補者の関係で唯一会長に抜擢されたが、リーダーには見えない。その中身は逆で穏和ながらも厳しさを兼ね備えた指揮者資質を持つている。

「なんかあつた？」

「…」

(西君にM宣言されました)

脳内では答えながらも馬鹿馬鹿しく感じた。現実味がないのだ。

「…はあ。今日の議題は？」

私は少し考えて答えた。

「野球愛好会の部への昇格について」

「それは先月のだ」

まだ肌寒い四月。私はスカートの中で太ももをすり寄せた。気まずかつた。会長と自分の周りでは桜吹雪が、それはもう美しいとうのに。

奈々富は寒さを考慮して木々の風下を選んでくれたが、足元を吹

き抜ける風は防ぐことができない。私は寒さに耐えて返答ビードルではなかつた。

『凍てつく冬の白化粧の中

聖靈達を追い越して笑む

僕らを止めるものなんて

なにひとつ無いんだって』

「…つたる。聞いてる?」

(はい、瑠衣の曲に気をとられました。スマヤン)

「え?」

奈々富は呆れ果てたのか細い手をぶらぶら縦に振つて、床ろう、と溜め息混じりに言つた。どうやら、強制に追求する気は無かつたよつだ。私は孤独と安心に挟まれて校舎に戻つた。

(教室で西と目会わせたくねえなあ)

避けるとそれは来るもので、生徒会室から戻る最中に私は西と鉢合わせしてしまつた。

「天草!」

「うわ…マジか」

西の呼び方がワンランク変わつているのも気づかず、私は西の脇から逃げようとした。だが、瑠衣みたいに白い手に邪魔される。

(何から今まで瑠衣に似ているんだから…抵抗しちらいいなあ)

「…怒つてる?」

西の顔が目の前にあつた。

(うわわ、怒つてないから離れるお)

間近で見た瑠衣：西の瞳は、藍色では無かつたが引きつけられる何かがあつた。慌てて目を剥らすが残像が残つてゐる。

頬のラインが細く、唇は赤みがかつてゐた。軽蔑するほど苦手な髪は存在すら感じられなかつた。

爆発しそうな全身を抑えて、西をもう一度見る。睨みつけたつもりだつた。

「…可愛い」

(ギヤあああああああ！ 瑠衣…瑠衣様の笑みだ。悶え死ぬ)

一昨年の冬のインフルエンザを鮮明に思い出すほど顔が熱かった。こんな体感は今まで無かつた。男子に、瑠衣じゃない一般の男子に興奮するなど。

「悶え死にそう？」

西のいやらしい笑みが目の前にあった。

記憶が今日は曖昧だった。とりあえず、片時もCRANEが頭から離れなかつたのは確かだ。西に見つめられたときに丁度サビの『神すら射落とすその笑み』が流れて、卒倒しそうだつた。結論から言ひつと、私は西を殴り飛ばして逃げたらしい。五限目に彼がボイコットしたところをみると、大分痛手を負わせてしまつたようだ。

(もももも悶え…悶え死にそうとか訊いてくるから)

今朝まで圈外だつた西が脳内の半を占拠していた。瑠衣すら端に追いやられている。

(なん…つ…なんなんだアイツ)

「この…」

「いやあー？」

余りに不意打ちな言葉に飛び上がつてしまつた。

「椎名はねー、ぶつてるけどMだね。今も嬉しがつてるし」

「…美伊奈ああ」

今は学校帰りに美伊奈と珈琲喫茶に来ていた。先ほどから記憶整理に暴走する私を静かに待つていた彼女だが、我慢の限界らしい。

「暴露しちやつてよお。西に告白されたんでしょう？ 瑠衣スマイルで」

「マジやめてそれ…」

美伊奈がニヤニヤしながら髪をいじくりまわす。

「あたしも見たかつたなあー 瑠衣スマイルが出来る男子がいた

とはね。しかも何だっけ…『悶え死にそり』とかつ最高すがる。ウケる」

（受けねーつづのー）

全力で否定したい衝動をブラックコーヒーで流し込む。苦い後味が喉内に広がった。美伊奈は黄色いカラコンを入れた妖艶な目で始終を見つめていた。

学校近くの喫茶は学生で賑わっていた。アンティークな小物が窓辺を彩る隠れ家的な雰囲氣で、女子高生の好みを掴んだ店なのだ。

「椎名って彼氏いたっけ？」

「いません！」

「奇遇だねえ、あたし六人」

「はあ？」

美伊奈は破顔して指で六を示した。優越感に浸つてか、それから上から目線で付け加えた。

「だから早く西君と付き合つて、経験しちゃいなよ」

（馬鹿なのか）

私は妙な汗をかいてきて、居心地の悪さを感じた。上着のポケットからハンカチを探り出して額を拭う。

「瑠衣ばっか見てないでさー。モテるんだからチャンス逃しちゃダメ」

カフェオレのストローをクルリと回して美伊奈が警告した。先から垂れた褐色の液体が雨の降り始めのようにテーブルを潤す。

「もてたことないです！」

「なに言つてんの、髪薙めて近づいてくる奴一杯いるじゃん」

一瞬ヘアフェチの奴らを思いだす。寒気が走った。

「あいつら…冗談！」

ペーパータオルでストローを拭きながら美伊奈は言い返す。

「あんなに選択肢あるのよー。羨ましいんだから」

「好きな奴いなきや意味ないじやん！ てか薙められるのとか苦手だし」

「やつぱりMだ」

「どこが！」

「西君に責められて嬉しかったんでしょう？」 瑠衣様のスキャラフに

骨抜かれてるんでしょ？ 否定できる？」「

「…出来ません」

私は負けを認めて、会計の札を持った。

喫茶を出で、一人で駅に向かつて歩きながら延々としゃべった。
マフラーに「コートを着込んだ今は春風など気にならなかつた。

「この間瑠衣がさ、司会者イジメしてたせー」

「見た見た。『君つて顔は綺麗だけど、僕の扱いは下手だね』つ
て。なんかドキドキした」

「だから普通はドキドキしないって」

「あとさ美伊奈、ライブのときも『今夜僕に抱かれたいなら、ス
テージに登つて来なよ。一番にはキスしてあげる』って言つて警備
員に地獄の一日を送らせたんだよ。二万人の会場がグワつてステー
ジに襲いかかつてさ」「

「あんたは真つ先に走つていつたでしょ？ 警備員とかお構いな
しに」

「そこまで大胆じゃな…お」

「どしたの？」

不自然なトーンを素早く感じ取つた美伊奈が私の視線の先を見る。
既に駅のホームに着いていた私たちの、向いの岸といつ形になるが。

「…西じゃん！」

(悪夢だ)

呑まれた日常（後書き）

殴り飛ばしてしまった西に椎名のとった行動とは？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1991ba/>

悪戯な思春期

2012年1月5日20時47分発行